

## 衝撃都市からゾーン都市へ

——二〇世紀シカゴの都市改革再考——

中野 耕太郎

【要約】 本稿では二〇世紀転換期から一九二〇年代のシカゴに現れた多様な都市改革の運動と言説を取り上げ、アメリカ現代史における都市認識の変遷を考察した。具体的には、①セツルメントハウスが行った貧困層の住宅改善、②財界が主導した大規模都市計画、③第一次大戦前後の時期に台頭する都市社会学、を素材に、都市エリート的環境観、空間認識、そしてナショナルリズムとの関係等を総合的に分析した。検討をとおして、次のことが明らかになった。第一に、二〇世紀初頭には都市の住環境、建造環境に能動的にコミットしようとする幅広い知的潮流が形成され、それが都市をひとつの有機体として統合的に捉える思考を生んでいた。第二に、そうした都市アイデンティティは、戦時の国家による都市動員をひとつの契機として後退し、そのことが都市内部に胚胎していた人種、エスニック間対立を表面化させる一因となった。第三に、この過程で一九二〇年代には、都市空間を社会的、階層的に分画された構造と見る認識が定着していった。こうした都市認識の展開は、「空間分断の学」としての性格を強める今日のアメリカ都市史の背景を知るうえでも重要であろう。

史林 九五巻一号 二〇二二年一月

### はじめに

アメリカの都市史研究は、一九六〇年代に社会史の一分野としてその地位を確立して以来、いわば「空間分断の学」として発展してきた。六二年に刊行されたサム・バス・ワナーJrの『ストリートカーの郊外』は、近現代アメリカの都市

化現象をはじめて包括的に検討した記念碑的な歴史研究であるが、ここにおいてすでに、都市史の主たる論点が、都市なる「空間」の歴史的な膨張と内的な分画化にあることが明示されていた。すなわち同書は、従来の生産と消費、労働現場と住宅地が一体化した親密な「徒歩圏の都市」が、二〇世紀転換期におこった交通イノヴェーションを契機として、急激な外延的拡大を経験し、それと同時に都市内部の機能分化（土地利用の特化）と階層ごとの住み分けが進行したと論じた。ワーナーは、この過程の帰結として「郊外」という周縁部を擁するメトロポリスの誕生を説明するのである。<sup>①</sup>

都市の空間的な多元性を所与の分析枠組みとする研究は、ステファン・サINSTROOMの数量史学が牽引した七〇年代の「新しい都市史」にも色濃く引き継がれていく。センサス原簿などをもとに、文化・エスニック集団ごとの職能階梯と地理的空間の専有状況を数量的に分析する手法は一時代を築いたが、研究の主眼は、ヘテロな都市の内部構造における人口配置とその流動性の実証にあった。<sup>②</sup> もっとも、数量史の「客観性」への信頼はほどなく薄らいでいく。「新しい都市史」の多くは、セオドア・ハーシユバグらから歴史的な都市形成過程を軽視する、いふなれば、すでにある「都市での歴史」にすぎないとの批判を受けた。ハーシユバグらは、特定の環境と人間行動の関係性を問い直す、「プロセスとしての都市」の歴史を提唱したのであり、その後、一九八〇年代、九〇年代以降の都市史研究ではより文化的、政治的な側面に注目が集まってきた。<sup>③</sup> こうした都市空間と社会行為を結びつける研究視座は、都市内部の分裂やコンフリクトの歴史に新しい意味を与えるものでもあった。都市計画と郊外化の関係やボス政治家と改革者の対立といった伝統的な論題についても、単なる新旧都市勢力のイデオロギー対立と解釈するのではなく、都市内部の特定空間の奪い合いや文化的な中心と周縁の抗争といった観点から見る理解が定着してきた。<sup>④</sup> 「空間の分断」は、やはり最も重要な思考枠組なのであった。

むしろ総体としての「都市」を問題にした議論は、ハーバースマス流の公共文化論を援用した近年の研究群に見出せるかもしれない。一九世紀ニューヨークの民主的「市民文化」の創出を描いたトマス・ベンダーの研究や、フィリップ・エシントンの二〇世紀「公共都市」論は、政治コミュニケーションの観点から都市化を描いた興味深い業績である。もっとも、

これらの文化研究は、物理的空間ないし環境としての都市の歴史を論じてきたワーナー以来の研究史とは少なからず次元を異にしよう。元来、歴史の中の都市言説それ自体は、各時代の建造環境の変遷を考察するうえで欠かせない重要性を持つはずである。だが、上の公共圏分析にはその観点が弱い。少なくとも二〇世紀初頭の革新主義期などには、ある種の全体性をもった「都市意識」が広く共有され、多様な都市環境論や都市計画が喧伝されたことを史実は示すが、そうした同時代の認識が、いかに実際の都市空間の形成に寄与し、我々の都市を見る目を左右してきたのかという問題は十分に検討されてこなかった（本稿はこの点に注目して議論を進めることになろう）<sup>⑤</sup>。

また、そもそもベンダーやエシントンの研究自体も「分断」の影から逃れ得ない。前者のいう「市民」は知識人層のみに限定された叙述であつたし、後者の「公共」は利益集団化した都市住民の多元的な統治を想定していた<sup>⑥</sup>。さらに加えて言えば、彼らの構築主義的アプローチは、いわば逆説的にマスター・ナラティブとしての都市論への懐疑とサブカルチャーへの注目を促したように見える。事実、一九九〇年代中葉以降、都市から離れた分散的郊外の事例やマイノリティのコミュニティ形成など、周辺の課題を扱うケース・スタディが叢生している。なかでも、カトリック系の都市住民の領域的な教区生活や、事実上の人種隔離による黒人コミュニティの独自性を強調する研究が多く産み出されてきた。ここに可視化された人種・エスニックの共同体は、ワーナー等が想定した都市中心部から郊外へと広がる階層化された扇状図、あるいは同心円図上の空間分画を、時に縦断・細分し、今日さらに複雑で多元的な都市空間イメージが一般化している<sup>⑦</sup>。もちろん都市なるものの脱構築は、都市内部のミクロコスモスへの注目だけでなく、より広域の地理空間への関心を惹きもいる。ウィリアム・クロノンの研究は、一九世紀シカゴの発展を、「大西部」という地方（region）の独特な自然環境と広大な農業地帯を擁する産業構造の中に位置づける。ジャネット・アブルゴドは二〇世紀末以降の「グローバル・シティ」の前身として、ニューヨークやシカゴの過去を遡り、北米の都市形成と経済の「世界システム」との連環を強調した。また、クリスティン・ホガンソンは、一九二〇年代に至るアメリカの都市消費文化が、国際的な文物の流通や

グローバルな様式・流行の受容に依拠して形成されたことを明らかにした。ただし、「都市的なもの」を地方やグローバルといった広域の歴史に開くことは、右に見た都市史研究の細分化傾向と相いれないわけではない。例えば、ホガンソンのグローバルな都市文化論は、重要な調査対象として大都市の移民コミュニティに注目し、その越境的な文化生活を綿密に考察するのであった。また、都市を「含む」広域の歴史は、総体的制度としての都市への関心の低さにおいても、最近のコミュニティ形成史などと共通する。しばしば、都市と外部世界を分かち境界はあいまいにしか描かれず、例えば、都市自治と国民国家の政治文化との関係といった都市アイデンティティに関わる根源的な問いは、後景に退いているのである。<sup>⑧</sup>

このように細分化と拡散に向かうアメリカ都市研究の傾向は、ひとつの負の側面として、一般的な歴史研究における都市史の孤立化を生んでいるように見える。歴史の中の「都市」がその輪郭を失いつつあることは、ナショナルな政治史や社会思想史との接合点を見えづらくし、それゆえ過去半世紀の都市史研究が発見した豊かな諸事例を、特定の歴史時代の概説に適切に組み込むのを困難にしている。さらに、アメリカの過去に遍在する都市とは何か、都市環境とはどうあるべきかという言説を等閑視することは、都市史研究自身の歴史性を見えにくくもしよう。都市にまつわる学知はどのような経緯から形成されてきたのか、また、「空間の分断」などに見られる研究実践上の「習慣」は、いかなる背景をもつものなのか、そうした問題を考えるうえでも、各時代の都市住民が獲得した都市認識を探求することは無駄ではない。

以上のような、問題をふまえて、本稿では二〇世紀転換期から一九二〇年代にかけてのシカゴに現れた多様な都市改革の運動と言説を再検討したい。もとより、この時期の都市改革史は決して新しい研究テーマではない。それは、一九六〇年代、七〇年代に盛んに論じられた革新主義政治史の一分野として関心を集めてきた。特に当時の研究では、中産階級改革者に特有な道徳観に関する分析が多くなされたが、小論では、むしろ同時代の都市認識がいかに物理的「環境」としての都市と結びついて形成され、またそうした認識が実際の都市形成にどれほど大きな意味を持ったかという観点から考察

を進めたい。具体的には、①セツルメントハウスが主導した貧困層の住宅改革、②シカゴ・プランなる大規模都市計画、③第一次大戦前後の時期に台頭するシカゴ大学の都市社会学、を検討の対象とする。三つの異なる系譜の都市改革運動を複眼的に捉え、俯瞰することでこの時代のシカゴ市民の都市問題認識をより一般的に把握するのが狙いである。

また、叙述の中には、一九一五年に始まるトンプソン市長時代のシカゴ市政と第一次大戦期の国家動員という権力政治の展開を簡潔にはあるが組み入れることにしたい。本稿が、主に考察するのは都市認識というひとつの社会構築物であるが、これを構成する歴史的な言説は、常に政治史や制度史と適切に接合されなくてはならない。第一次大戦前後の権力政治は、都市空間をめぐる公的な語りをどのように変容させ、その後の都市形成をいかに規定していったのだろうか。おそらくこの局面で、都市の全体性を担保した「都市意識」は退行し、人々は無数の都市コンフリクトに直面することになる。そして、革新主義期の思考とは異なった新しい都市秩序観が醸成されていくことになるだろう。そこに、今日なお歴史学者の都市観を呪縛する「分断」の契機があらわれてくるのではないか。こうした問いも小論の問題関心に含まれよう。膨張する空間としての近現代都市、これを持続可能で統合的な環境に保ちたいとする人々の願望、そしてある種の内的な分断ないしは境界を受容する「リアリズム」、本稿は、これらが交錯する過程に二〇世紀都市史の大きな歴史ダイナミズムを見ようとしている。それゆえ、考察の対象とする期間は、一九世紀末から一九二〇年代までと、敢えて長くとり、また、専門化・細分化の著しい研究状況に対抗する意味も込めて、可能なかぎり概説的な叙述につとめたい。

- ① Sam Bass Warner, Jr. *Streetcar Suburbs The Process of Growth in Boston, 1870-1900* (Cambridge, Mass. 1962); 竹田有「メトロポリスの誕生とアメリカ労働者階級」『史料』第七四巻五号（一九九一年）一〇三―一三四頁。アメリカ都市史の一般的な研究史については以下を参照のこと。Raymond A. Mohl, "New Perspectives on American Urban History," in Raymond A. Mohl ed. *The Making of Urban America* (New York 1997), 335-374; Timothy J. Gilroy, "White Cities, Linguistic Turns, and Disneylands: The New Paradigms of Urban History," *Reviews in American History*, 26, no. 1 (1998): 175-204.

- ② Stephan Thernstrom, *Poverty and Progress: Social Mobility in a Nineteenth-Century City* (Cambridge, Mass., 1964); Thernstrom, *The Other Bostonians: Poverty and Progress in the American Metropolis, 1880-1970* (Cambridge, Mass., 1973).
- ③ Theodore Hershberg, "The New Urban History: Toward an Interdisciplinary History of the City," *Journal of Urban History*, 5, no. 1 (Nov., 1978): 3-40; Hershberg ed., *Philadelphia: Work, Space, Family, and Group Experience in the Nineteenth Century* (New York, 1981).
- ④ Bruce M. Stave, ed., *Urban Bosses, Machines, and Progressive Reformers* (Lexington, Mass., 1984).
- ⑤ Philip J. Ethington, *The Public City: The Political Construction of Urban Life in San Francisco, 1850-1900* (New York, 1994); Thomas Bender *New York Intellectual: A History of Intellectual Life in New York City, from 1750 to the Beginning of Our Own Time* (New York, 1987).
- ⑥ Ethington, *The Public City*; Bender, *New York Intellectual*.
- ⑦ John McGreevy, *Parish Boundaries: The Catholic encounter with Race in the Twentieth Century Urban North* (Chicago, 1996); 中野耕太郎「信仰と『人種』——二十世紀式部都市のカラーリング」『アメリカ史評論』第一七号（一九九九年）五—五九頁；Arnold R. Hirsch, *Making the Second Ghetto: Race and Housing in Chicago, 1940-1960* (Chicago, 1983); 竹中興徳『「ナード」階級とニュー・シティの成立』（一九九五年 明日香書店）；Michelle R. Boyd, *Jim Crow Nostalgia: Reconstructing Race in Bronzeville* (Minneapolis, 2008).
- ⑧ William Cronon, *Nature's Metropolis: Chicago and the Great West* (New York, 1991); Janet L. Abu-Lughod, *New York, Chicago, Los Angeles: America's Global Cities* (Minneapolis, 1999); Kristin L. Hoganson, *Consumers' Imperium: The Global Production of American Domesticity, 1865-1920* (Chapel Hill, 2007).
- ⑨ Allen F. Davis, *Spearheads for Reform: The Social Settlements and the Progressive Movement, 1890-1914* (New York, 1967); Paul Boyer, *Urban Masses and Moral Order in America, 1820-1920* (Cambridge, Mass., 1978).

## 第一章 衝撃都市シカゴ

「大草原の湖沼に沈みそうになってもがいていた一つの村が、一人の人間の生涯の記憶の中で世界の五大都市にランクされる偉大なメトロポリスにまで成長した……シカゴは神から天命を授かった都市なのである」（『一九〇八年シカゴ港湾委員会報告』<sup>①</sup>）。地理学者J・ポール・グードが記したこの言葉を参照して、一九六〇年代の都市史家エイサ・ブリッグスは、シカゴを一九世紀末の「衝撃都市」(shock city)であったと評した。ブリッグスのいう衝撃都市とは、一九世紀以降の急激な工業化を背景に短期間で激的な膨張を経験した都市空間を指し、一八四〇年代のマンチェスター、一九三〇年代のロ

スアンジェルスもそのひとつだといふ。<sup>②</sup>

実際、シカゴの成長の歴史は瞠目に値する。一八三七年の市制施行後間もない一八四〇年に、人口わずか四四七〇人であったシカゴは、三〇年後の一八七〇年には三五平方マイルの市域に三二万五千人が暮らす中西部随一の都市となっていた。翌一八七一年には、一萬二千人が家屋を失う大火災（「シカゴの大火」）を経験するも、続く数十年間にその膨張はさらに加速する。一八八九年に大規模な周辺自治体の合併をへて、一九〇〇年には、一八五平方マイルの市域と一七〇万人の居住者を擁する押しも押されぬ巨大メトロポリスであった。この頃までに、シカゴは五大湖とミシシッピ水系を結ぶ水運と中西部鉄道網のハブとして交通・輸送の要衝を占め、ループと呼ばれた市中心部は全米有数の金融・商業センターとなった。市内にはループ直近のウェストサイドに被服産業や農業機械工業が、サウスサイドには全米の精肉販売額の九割を占めた食肉加工工場群（ストックヤード）が、さらにループから南東に一〇マイル離れたサウス・シカゴ地区には世界屈指の製鉄・鉄鋼業が展開し、周辺の農村だけでなくヨーロッパからも大量の労働力を引き寄せていた。シカゴの自治体としての領域拡大は、郊外の造成がおおよそ完了した二〇世紀初頭の時点ではほぼ終わるが、人口はその後もさらに増え続け、一九一〇年に二一八万人、一九二〇年に二七〇万人、一九三〇年には三三八万人に達する。その短期間の発展は、まさに「衝撃」というにたるものがある。<sup>③</sup>

もちろん衝撃都市とは、あくまで後代の歴史家が用いたひとつの表現にすぎない。しかし、この呼称は同時代の観察者が都市を前にして抱いた尋常ならざる興奮や、成長と退廃、希望と不安がないまぜになった慄きの感情を見事に言い表している。一面では、世紀転換期のシカゴは、進歩と豊かさを体現した約束の地であった。それは物質文明の極致であり、「欠乏」という人類史の常態を克服した夢の空間、前出のグードの言葉を借りれば「天命の都」なのだった。だがもう一面で、都市は経験したことのない規模の人口過密や未知の環境汚染ゆえに、無秩序と道徳的墮落の温床とも見られた。それゆえ、社会福音主義者のジョサイア・ストロンクなどは、「アメリカの都市は、ますます国家と国民にとっての脅威に

なりつつある」と書き、シカゴのような近代都市をアメリカ的価値とそれが支える国民共同体から逸脱した存在として警戒した<sup>④</sup>。

一八九三年シカゴ万博に訪れたイギリス人ジャーナリスト、ウィリアム・ステイードもまた、翌年刊行の『もしキリストがシカゴにやって来たならば』で、彼が受けた「衝撃」を記していた。ステイードは、ホワイト・シティと呼ばれた壮麗な万博会場の建築群に感銘を受け、シカゴの未来に近代都市の理想を見た。だが同時に、市内に広がる斜き出しの貧困と悪徳、不衛生に驚愕し、シカゴの現状を「ソドムとゴモラ」になぞらえて告発している。ステイードが見たのは、実のところ二つの異なるシカゴであった。ビジネス地区のループでは、早くも九〇年代前半までに街灯と公共交通機関（ストリートカー）の電化が進み、清廉な空気の中に高層ビルが林立するモダンな景観が立ち現れていた。また、ループで事業を営む中産階級の通勤圏に緑豊かな郊外が次々と開発されていた。その一方で、ウエストサイドやサウスサイドの工場に隣接した労働者居住区は、常に厚い煤煙で薄暗く、上下水道の整備はおろかゴミの収集・処理もままならなかったのである。階級分離にもとづく都市空間の二分化は、一九世紀「衝撃都市」の特色の一つだった<sup>⑤</sup>。

ステイードが抱いた墮落と腐敗、暴力と分裂の予感、アメリカ人リベラルにも共有された。マクレイカー（暴露ジャーナリスト）として名高いリンカン・ステファンズは一九〇二年の著書『都市の恥辱』で、シカゴについて「暴力と深い汚穢、騒音と無法、醜態、悪臭」が特徴づけると書き、各ワード（選挙区）を小国家のように支配するボス政治家がこれを助長しているとして、市政の非効率をも痛烈に批判した<sup>⑥</sup>。つまり、当時のリベラルな知識人は「過密」に代表される都市環境の「衝撃的」変化と、売春や賄賂・談合などの悪徳の蔓延を結びつけて思考することが多く、都市改革はしばしば、緑地と公園の系統的な建設や住宅建築基準の策定といった、公的・私的空間の規制・改良を指向した。その意味で改革者の多くはきわめて能動的な環境主義者であった。とはいえ、環境への関心は常に道徳のみに還元されたわけではない。彼らの環境主義は現代的な公衆衛生や医療の観点を含み持ち、さらに、公衆衛生と市民性が結合する二〇世紀的状况下に、



人種主義や排他的なナショナリズムを呼び込む場合すらあった。<sup>①</sup>先に引いたJ・ストロングの著作も、台頭する二〇世紀アメリカ国民国家の文脈から都市の害悪を難じたものだった。むしろ重要なのは、この都市的空間をめぐる改良においては、物質的な環境改善と道徳の浄化、医療・公衆衛生、アメリカ化といった問題群が分かちがたく結びついていたことである。これら都市にまつわる多様な環境主義の諸潮流が、いわば渾然一体となつてある種の規範に結晶していく展開は、のちに第一次大戦期の陸軍が実施した訓練基地・兵舎の計画的建設や性病予防運動などにも看取されよう。

もつとも、こうした環境意識の観念的な包括性にもかかわらず、世紀転換期の都市改革運動は常に具体的かつ実現可能な矯正のターゲットを掲げていた。シカゴ革新主義においては、移民や貧困層が暮らす「スラム」の存在こそが、当面、最大の都市問題だったといつてよい。ジェーン・アダムズ (Jane Addams) に率いられたソーシヤル・セツルメントやリベラルな慈善団体の活動家が、繰り返しスラムの住環境を調査し、特にテナメントと呼ばれた低劣な集合住宅の改善に尽力した。この運動は、その都市空間の捉え方において、「二分化」を容認した前世代のヴィクトリア的都市エリートと決別し、新しい包摂的な都市意識の形成を構想するであろう。

- ① J. Paul Goode, *The Report to the Chicago Harbor Commission: The Development of Commercial Ports* (Chicago, 1908), 77.
- ② Asa Briggs, *Victorian Cities* (1963; Berkeley, 1993), 56.
- ③ 歴史的なシカゴの人口構成については、City of Chicago, Department of Development and Planning, *The People of Chicago: Who We Are and Who We Have Been, Census Data on Foreign Born, Foreign Stock and Race, 1837-1970* (1976) を参照しよう。
- ④ Harold L. Platt, *Shock Cities: The Environmental Transformation and Reform of Manchester and Chicago* (Chicago, 1969) を参照。
- ⑤ Harold M. Mayer and Richard C. Wade, *Chicago: Growth of a Metropolis* (Chicago, 1969) を参照。
- ⑥ J. Paul Goode, *The Report to the Chicago Harbor Commission: The Development of Commercial Ports* (Chicago, 1908), 77.
- ⑦ William T. Stead, *If Christ Came to Chicago!* (Chicago, 1894); Mayer and Wade, *Chicago*, chapt. 3, 4; Abu-Lughod, *N. Y., Chicago*, 100-106.
- ⑧ Lincoln Steffens, *The Shame of the Cities* (1902; New York, 1904), 234.
- ⑨ Boyer, *Urban Masses*; Margaret Garb, *City of American Dreams: A History of Home Ownership and Housing Reform in Chicago, 1871-1919* (Chicago, 2005); Platt, *Shock Cities*, Chapt. 1.

## 第二章 スラムの改良と都市意識

### (一) テナメント改革

シカゴのスラム住環境対策は、これまで、二〇世紀転換期以降の革新主義の社会統制運動の文脈で語られることが多かった。それは、ヴィクトリア期中産階級の共和主義的な政治文化や特権的なエリート意識と、革新主義者の「社会的なもの」へのより強い関心とを区別して考える通説的な都市改革史の研究枠組みに合致する。しかし、最新の業績の中には、スラム問題——特にテナメント改革の起源を、やや長く遡って一九世紀後半の公衆衛生論に見出すものがある。いずれも二〇〇五年に刊行された二篇の著作、ブラットとガープの分析は、両者ともシカゴでは一八八〇年代までに水質汚濁と大気汚染、そして伝染病の流行が、工業都市特有の「都市問題」として喧伝されていたことに注目し、その際、ループに近いウエストサイドのテナメント群が公衆衛生の脅威、疫病の温床として指摘されたことを特記していた<sup>①</sup>。すでに都市中心部の環境悪化は広く認知され、田園の住環境と徳育を結びつけて考える中産階級の中には、エヴァンストンやオークパークのような郊外に「脱出」するものが現れていた<sup>②</sup>。テナメント問題の「発見」は、そうした一九世紀的な「領域の分離」と機を一にしていたのであり、その意味で深い階級的含意と都市空間の分裂を伴うものだった。だが一方で、この問題は、近代都市における新しい公共観と環境への取り組みを育むきっかけともなった。公衆衛生はそうした展開を促すキー概念のひとつだった。

シカゴ市の衛生事業の開始は早い。一九世紀中葉に数次のコレラ流行を経験した同市は、一八六七年には常設の保健委員会を設置している。一八七一年、シカゴ大火の被災者に新鮮な飲料水を供給する事業を手掛けたことから、保健行政は発展し、一八八〇年代には、オスカー・デウルフ (Oscar De Wolf) 保健コミッショナーのもとでさらに近代化が進んだ。

デウルフはテナメントの衛生検査に積極的で、五名程度であった専門の検査官を五〇名規模にまで増員した。そもそもテナメント検査は一定の私権の制限を伴う自治体ポリスパワーの拡張を意味する。元来、テナメントの建物は家主の私有財産であり、その居住空間には借主のプライバシー権が存在するはずである。それにもかかわらず、保健行政の拡大が可能になったのは、これを公益の観点から支援する世論の後押しがあったからである。プラットはこの公益理解を「環境正義」と指称する。衛生サービスの平等な分配を柱とする公正概念は、一九世紀都市エリートの間にも広く支持を集めたとい<sup>③</sup>う。

都市改革者の住環境への取り組みは、世紀転換期が近づくと、別次元への高まりを見せる。テナメントの過密と不衛生を借主の怠惰や依存性に帰してこれを放置するのではなく、むしろ建造物の物理的改善が住民資質の改良につながるとの信念から、これに積極的にコミットする姿勢が現れてくる。ひとつの転機は細菌学の誕生であろう。デウルフ保健局時代の一八八三年にコッホがコレラ菌を発見したことは、これまで漠然と瘴気しょうきや汚穢を疫病の原因と見なしてきた公衆衛生観に大きな変更を迫った。病原体が伝染病の流行を引き起こす以上、スラムと距離を置くだけの領域分離論では、市民の安全は保たれない。細菌の繁殖を前に、都市空間の観念的な分割は意味を失う。スラムを含めて都市はひとつの運命共同体なのだ<sup>④</sup>。ここに、細菌の発生源とみられる地区の住宅問題や社会生活に医療のメタファーから専門主義的なアプローチをする言説や、自らスラム内部に深く入りその改善に能動的に関わろうとする新世代の環境主義が誕生する。

そうした能動的な環境主義の拠点となったのが、一八八九年にJ・アダムズらによってウエストサイドに創設された、アメリカ初のソーシヤル・セツルメント、ハルハウスだった。セツルメント運動は、都市の移民、労働者地区に支援センターを設立し、ソーシヤルワーカーが常駐する慈善活動で、世紀転換期における「貧困の発見」——すなわち貧困を個人道徳ではなく社会構造の問題と見る立場——に呼応して全米の都市に広がった<sup>⑤</sup>。政治史家ボイヤーは、革新主義者を「ポジティブ」な環境改善論者と抑圧的な社会統制派（反酒場、売春防止など）に二分して捉え、前者の代表としてハルハウス

の活動を高く評価している<sup>⑥</sup>。しかし、小論は必ずしもそうした分類が妥当だとは考えない。セツルメントのテナメント改革もまた、移民や労働者の近隣生活に独善的な価値観を押し付ける抑圧的な面があった。筆者がこれを能動的な環境主義と呼ぶのは、アダムズ等のスラム的状况への直接的なコミットメントを、自然回帰や田園生活へのあこがれが特徴づけた一九世紀中産階級の消極的な環境主義や領域分離論と対比する視点による。むしろ、都市改革史においてより細かい概念整理が必要なのは、ここでいう革新主義の能動的な環境運動から、第一次大戦期を境により専門技術的な学識者・テクノクラートの世代が台頭する事実に関わるものだろう。この点については第四章で再び論じることにした。

さて、ハルハウスは、開設当初より近隣のスラムの住環境に特に強い関心を示していた。早くも一八九三年には、レジデント達の戸別訪問をもとにウェストサイドの詳細な住宅地図を作製している<sup>⑦</sup>。さらにハルハウス・グループは、一九〇〇年には、都市住宅協会 (City Home Association : CHA) という住環境改善団体を立ち上げ、四万三千人の住民を対象とする大規模な住宅調査を市内の移民・労働者地区で実施した。調査員は、個別のテナメントへ直接立ち入り、過密の度合いや室内への採光、換気、排水設備等、住宅の物質的条件を詳細に記録していった。翌一九〇一年、CHAはハルハウスのレジデントで貧困問題の専門家、ロバート・ハンター (Robert Hunter) を中心に報告書『シカゴのテナメント状況』を刊行した。そもそもこの調査の背景には、「第九区、第一九区内のユダヤ人、イタリア人地区」、「第一六区のポーランド人地区」、「第一〇区のボヘミア人地区」と名指しされ、恣意的に選ばれた調査対象地の住民が深い貧困を抱えているという前提があった<sup>⑧</sup>。だが、同報告書の叙述は、一貫した環境決定論によって特徴づけられている。スラム住民にとりついた貧困の影は、常に住居の物質的環境とつなげて描かれている。すなわち、「常ならざる病、死、貧困、放縦、犯罪はいつも劣悪な住環境と結びついている……過密状態、汚れた空気、暗い室内、不衛生な家屋は……競争的闘争にハンディキャップとなり、多くの家庭を辛く墮落的な公共慈善への依存に引きずり込む……それ(テナメント)が独立心を破壊するのである……荒廃し、健全なものがほとんど何もなく、汚れ、過密状態にあるテナメントの中で、貧者と物乞いが生まれるの

だ」と。<sup>⑨</sup>ここに、都市の私的空間の過密化と病理、悪徳、そして貧困を不可分のものとする心性を見るのは容易であろう。C H Aのスラム調査は報告書公表の直後の一九〇二年に、シカゴの広域で腸チフスが大流行したという偶然も手伝って、大きな政治的インパクトを持った。同年、ハルハウス・グループが提案した市テナメント条例案が圧倒的多数の支持（四七対七）を得て市議会を通過した。一九〇二年条例の概要は次のとおりである。①二世帯以上が住む全集合住宅を対象として、室内の明度、換気、衛生状態を規制する——各部屋に最低ひとつは窓があること、②水道設備、シンク、配管の設置基準を明確化する、③屋外簡易便所を禁止する。この条例は、市政府のポリスパワーを拡張して、私的な建造物の内部環境を徹底した監視下に置くという意味で画期的だった。ただし、一九〇二年条例では、旧い猟官制で選任される保健局コミッシヨナーが、検査実務に依然として大きな裁量権限を保持し、また、規制の対象が新築物件のみであったために直近の効果は疑わしかった。アダムズらはこのあと、保健行政人事をめぐる政治を闘うとともに、下宿人の排除など居住習慣の改善運動に力を入れざるをえなかった。だがそのことが、テナメント住民の家族文化と貧困や悪徳を結びつける危険なロジックを孕んでいたことは後述するとおりである。<sup>⑩</sup>

## （二）都市意識

このようにスラムという、中産階級にとっていわば他者の空間にも能動的にコミットしようとする二〇世紀初頭の改革者は、都市を統合されたひとつの有機体として見るのであり、その点で旧世代のエリート都市観と一線を画していた。とはいえ、実際の運動の中では新旧の多様な改革潮流が混在していたのも事実である。たとえば、ハルハウスとも関係の深かった、新世代の民間慈善団体であるシカゴ慈善局（Chicago Bureau of Charities : CBC）は、『協働（The Cooperation）』という機関紙を発行したが、この中で定期的に記事として取り上げられた論点を列挙すると次のようになる。一、住環境（テナメント規制、市営の単身者宿泊施設）、二、少年非行（保護観察、少年裁判制度）、三、社会福祉（貧困撲滅、寡婦年金、児童

労働禁止、四、公衆衛生（結核撲滅、遺伝学）、五、公園増設、児童の屋外活動、夏期林間学校<sup>①</sup>。現代的な公衆衛生や公共空間の社会化の要求、あるいは福祉国家時代を先取りした社会政策が目を引き、一方で、ヴィクトリア期中産階級に特有の自然帰願望の残滓と見えるものもある。だが、旧世代エリートが自ら都市の害悪の及ばぬリスベクタブルな郊外へ消極的に退避し、結果として都市空間の階級的分断を容認したとすると、二〇世紀の改革者はむしろその分裂こそを克服すべきものとみていたのであり、そこには大きな違いがあった。

なかでも、ジェーン・アダムズは衝撃都市が生んだ、社会の二分化を特に深く懸念していた。アダムズは「他の半分の人々の（貧しい）生活から目をそらすことは、自分自身の最も大切なことから目をそむけることである」と主張し、敢えて都市中枢のスラムに居を構え、貧困層と共に暮らす道を選んだのだ。その究極の目標は、分裂した都市住人の間に「橋をかけ」、「人類の絆」を再建することだった<sup>②</sup>。こうした統合と包摂の議論は、シカゴ以外の都市改革者にも広く共有された。例えば、ニューヨークのフレデリック・C・ハウ（Frederic C. Howe）は二〇世紀初頭に書いた一連の論文の中で、「共通の福祉のために闘い、共通の苦悩を受け入れる……都市意識（city consciousness）」の形成を論じ、「社会化のエンジニアシーとしての都市」こそが、真の民主主義が実践できる場であると主張した。ハウのニュアンスの中には、国家から自立した地方政体において、民主主義の自治的性格は最大限に発揮されると思いが含まれている<sup>③</sup>。

だが、その一方で都市社会の統合は、時にナショナリズムの言葉で語られもした。なぜなら、都市改革者が矯正と包摂の対象と見たスラム住民は多くの場合、外国からの移民だったからである。そして、彼らに見苦しくない環境を与えようとする努力は、しばしばアメリカ化の一環と位置づけられた。改革者にとって、いわゆる都市問題の多くは「外国人問題」なのだ。ちなみに、一九一〇年当時のシカゴでは総人口二一九万人の三五・九%が外国生まれで、二世世代を含めるとその数は一六九万人（七七・五%）に達していた。特に、サウスサイドのストックヤード地区の移民人口は多かった。精肉工場群に隣接した約一マイル四方の狭い居住区は建物の九〇%以上が一九〇二年条例以前の劣悪なテナメントで、こ

の中に五万七千人の労働者とその家族が極度の過密状態で暮らしていた。そして、その約半数は新来の南東欧系の移民だった。<sup>⑭</sup> ハルハウスのレジデントを経て、この地区にシカゴ大学セツルメントを開設した、メアリー・マクダウエル (Mary McDowell) は、住環境改善の向上をとおしたスラム住民のアメリカ化を論じた人物だった。外国文化の保持に寛容な文化多元主義者として知られるマクダウエルにとつて、アメリカ的生活の公準は物質的であるべきだった。曰く、「子供のいない若い夫婦なら」彼らが生まれたストックヤード地区よりも清潔かつ美しい場所、風呂とパーラー付きの四部屋あるアパートメント」に住むことが、「見苦しくないアメリカ的生活水準」であると。文化的同化に先行する、生活水準と環境の同化を強調する議論はリベラルな包摂の都市哲学であった。<sup>⑮</sup>

しかし、改革者が抱いた移民の公衆衛生と住環境への関心は、それ自体、逆説的に排外主義や科学的人種主義といった分断の契機と背中合わせでもあった。医療史家マーケルとスターンがいうように、この時期、入国管理と公衆衛生の文脈では、「移民は一貫して病原菌と感染に結び付けられ……様々な身体的、社会的病理の原因としてのステイグマを与えられていた。」またそれは、「持続的な生物学メタファー」を媒介して健全な国民形成の言説と密接に関わっていた。すなわち、「無制限の移民を、国民の社会的健康にとつての潜在的なリスク」と見る一般に流布した考え方である。また、一八九〇年代以降の細菌学の発達は、医療専門家に伝染病封じ込めの行動規範を与えることで、彼らの社会への直接的介入をうながした。そして、さらにそうした専門医療と同時代の科学的人種主義——特定の「人種」の生物学的劣勢を言う言説——が共鳴し合う中で、移民の身体は厳格な監視の対象となった。入国時の移民の健康診断を管掌した合衆国公衆衛生局 (U. S. Public Health Service) が、医学的事由により入国拒否を宣告した事例は、一八九八年には拒否者全体のわずか二%であったが、一九一五年には六九%にまで急増する。<sup>⑯</sup> こうした公衆衛生と医学が生みだす国民の境界イメージは、スラムの住環境をめぐる改革者の想像力にも影響を与えざるを得ない。一九〇一年、都市住宅協会 (UHA) の報告書を執筆した R・ハンターは、三年後に著書『貧困』を刊行した。この書物でハンターは、都市の貧困を個人道徳から切り離し、社会

問題として認識する必要を説く一方で、貧困の「社会的」原因の一つとして、「快適さや上品さに独自の低い基準しか持たない」新移民の流入を挙げ、貧困撲滅のための積極的社会保障として移民制限に全面的支持を与えたのである。<sup>①⑦</sup>

スラム環境への積極的コミットメントは、都市意識の形成と移民の社会的包摂の流れを作ると同時に、新たな差異の感覚の母胎ともなった。それは、南・東欧移民だけでなく、非白人住民の隔離・排斥にもつながる潮流であった。一九一一年にスラムの売春防止を謳って、社会調査を行ったシカゴ市反悪徳委員会 (Vice Commission of Chicago) は、サウスサイドの黒人居住区、通称ブラックベルトの低劣な住環境に目を付け、「シカゴの社会悪の歴史は黒人人口と固く結びついており、悪所は常に黒人地区に作られてきた」と報告した。また、翌年シカゴの保護観察制度の推進者でハルハウスの会計責任者でもあった、ルイーズ・ボーン (Louise de Koven Bowen) も少年犯罪とのかかわりからブラックベルトの住環境を調査し、同地区の貧困の背景に、著しく不安定な雇用や過多な下宿人、シングルマザー家庭の多さ等を発見し、それが「黒人特有の」問題であると論じていた。<sup>①⑧</sup> 都市を一体のものとして捉える構想の中に、一九世紀の領域論よりもむしろ厳格な他者創出が起動していたともいえるが、それでもなお第一次大戦前のシカゴにおいて、「都市意識」は都市文化の中核にあった。そこには、なお「分けること」への抵抗、全体性への憧憬が存在していた。

- ① Platt, *Shock Cities*; Garb, *American Dreams*.
- ② Michael H. Eber, *Creating Chicago's North Shore: A Suburban History* (Chicago, 1988), 43-126; Mary Corbin Sies, "The City Transformed: Nature, Technology, and the Suburban Ideal, 1877-1917," *Journal of Urban History*, 14 (Nov. 1987): 81-111.
- ③ *History of Medicine and Surgery and Physicians and Surgeons of Chicago* (Chicago, 1922), 339-348; Garb, *American Dreams*, 68-85; Platt, *Shock Cities*, 18-23, 343.
- ④ Garb, *American Dreams*, 73; Platt, *Shock Cities*, 309.
- ⑤ Kolaro Nakano, "How the Other Half Was Made: Perceptions of Poverty in Progressive Era Chicago," *Japanese Journal of American Studies*, 22 (2011): 63-87.
- ⑥ Boyer, *Urban Masses*, 189-292.
- ⑦ Residents of Hull-House, *Hull House Maps and Papers* (Boston, 1895).
- ⑧ Robert Hunter, *Tenement Conditions in Chicago: Report by the Investigating Committee of the City Homes Association* (Chicago, 1901), 12, 14.



- ⑧ *Ibid.*, 146-147.
- ⑨ Edith Abbott: *The Tenements of Chicago: 1908-1935* (Chicago, 1936), 59-65; Nakano, "How the Other Half Was Made."
- ⑩ *Cooperation*, 1-10 (March 9, 1901), 1-36 (Sept. 7, 1901), 2-27 (July 5, 1902), 2-52 (Dec. 27, 1902), 3-7 (Feb. 14, 1903), 3-10 (March 7, 1903), 3-19 (May 9, 1903), 4-2 (Jan. 9, 1904), 7-7 (Feb. 16, 1907), 7-22 (June 1, 1907), etc.
- ⑪ Jane Addams, *Twenty Years at Hull-House: With Autobiographical Notes* (New York, 1910), 116-17, 126, 235.
- ⑫ Frederic C. Howe, *The City: The Hope of Democracy* (1905; Seattle, 1967), 45; Howe, *The Modern City and Its Problems* (New York, 1914), 76-85, 252-272; Howe, "The City As A Socializing Agency: The Physical Bases of the City: The City Plan," *American Journal of Sociology*, 17, no. 5 (Mar., 1912): 590-601.
- ⑬ City of Chicago, *The People of Chicago*, 21-32, 54-56; Abbott, *The Tenement*, 181; James R. Barrett, *Work and Community in the Jungle: Chicago's Packinghouse Workers, 1894-1922* (Urbana, 1987), 71-74.
- ⑭ Mary McDowell, "Live on Higher Plane" *Chicago Daily News*, July 29, 1904; 中野謙太郎「ノー・シヤル・ブーナムスリヤン——メモリー・ブナムスリヤル文藝家手がな」『人文雑誌』五二二(一九〇五年)八三一―八三三頁; Mary McDowell, "Here is the Real American Girl," *Independent* (Oct. 4, 1919): 31; Kotaro Nakano, "Preserving Distinctiveness: Language Loyalty and Americanization in Early Twentieth Century Chicago," *Proceedings of the Kyoto American Studies Summer Seminar*, 2000 (2001): 113-124.
- ⑮ Howard Markel and Alexandra Minna Stern, "The Foreignness of Germs: The Persistent Association of Immigrants and Disease in American Society," in Paul Spickard ed., *Race and Immigration in the United States: New Histories* (New York, 2011), 203-4, 208.
- ⑯ Robert Hunter, *Poverty* (New York, 1904), 270.
- ⑰ Vice Commission of Chicago, *The Social Evil in Chicago: A Study of Existing Conditions with Recommendations* (Chicago, 1911), 38; Juvenile Protective Association, *The Colored People of Chicago* (1913).

### 第三章 シカゴ・プラン——二〇世紀の都市計画

#### (一) パーナム構想

二〇世紀初頭の都市の環境改善運動には、テナメント改革とは異なるもう一つの大きな潮流があった。それは、いわゆる都市計画運動であった。シカゴでは、一九〇七年までに、かつてシカゴ万博(一八九三年)の芸術理事を務めた建築家、

ダニエル・バーナム (Daniel Burnham) を中心に包括的な構想・計画が起案されていた。この運動は、もともとシカゴ商業クラブに集う、財界人、富裕層の後援に依拠して立ち上げられた民間の活動であった。バーナム案に献金を寄せた人々の中には、世界最大の農業機械メーカー、インターナショナル・ハーベスター社を経営しつつ、シカゴの神学教育を支援したサイラス・マコーミック二世や、ストックヤード一の食肉加工業者 J・オグデン・アーマー、通信販売大手シアーズローバックの社長にして、ブッカー・T・ワシントンのタスキギー黒人学校のスポンサーだったジュリアス・ローゼンウォルド (Julius Rosenwald) 等、社会意識に富んだシカゴ財界の巨星が名を連ねていた<sup>①</sup>。

一九〇九年、約八万ドルの資金を得たバーナムは、構想の青写真である『シカゴの計画』を出版している。水彩画家ジュレ・グエリンの壮麗なカラー図版を惜しげもなく使ったこの豪華本は、アテネ、ローマの時代に遡る帝国首都の列伝として書き起こされ、ロンドン、パリに続く近代の都としてシカゴの未来が位置づけられている。『シカゴの計画』は、ループから半径約六〇マイル (自動車で二時間) の郊外都市を含む領域を、おおむねメトロポリス圏と見て、その機能と景観を全体として整備する必要をといた。そして、書物の中盤以降では、市内の具体的な建造環境について詳述される。ミシガン湖畔を干拓して巨大な記念碑公園 (グラント・パーク) を造成し、そこからウェスト・サイドに向かう大通り (コングレス通) を建設する。また、ミシガン通りや一二丁目などの幹線道路を拡幅するとともに、碁盤の目の道路網に対角線のブルヴァードを加え、ループの混雑を解消する。さらに、煤煙をまき散らすイリノイ・セントラル鉄道線路をシカゴ川以西に付け替え、ダウンタウンの六カ所に散在した駅を一カ所に統合する。そして市内から郊外にかけて中・小規模の公園網を形成し、市街の緑化を行う、などなど。また、交通システムと公園群の配置を示した挿絵が数多く掲載された。その多くは、ループを中心に郊外へ向けて遠心的に拡大するイメージの地図であり、なかには、ウイスコンシン南部やインディアナ北部に州境を越えて延伸するハイウェイがメトロポリスのさらなる膨張を予示させる広域図もあった<sup>②</sup>。

こうしたシカゴ・プランは、世紀転換期の都市美化運動の系譜のうえに語られることが多い。アメリカの都市美化運動

は、ヨセミテ国立公園プロジェクトやワシントンDCの再開発で知られるニューヨークの建築家フレデリク・オルムステット・Jr (Frederick Law Olmsted, Jr.) らの指導のもと、当時の建築界に大きな影響力を持った。都市景観の「美」そのものに最大の価値を見出すその運動は、ヴィクトリア的な「古い」環境主義の中で育まれた改革潮流のひとつといえるが、三〇もの都市に「芸術委員会」が創設されるなど、少なくとも第一次大戦前には有力な都市芸術運動で、ペンシルヴァニア州ハリスバーグのような小都市でも計画的な景観美化が試みられた。シカゴ・プランのバーナム自身もオルムステッドと近い関係にあり、首都のナショナルモール国立公園（一九〇二年マクミラン委員会）プロジェクトに参画している。<sup>③</sup>

その後、美化運動の潮流は、都市の公共空間のより包括的なデザインを目指す都市計画運動の一翼を担うようになり、一九〇九年に始まる全米都市計画会議 (National Conference on City Planning: NCCP) ではオルムステッド自身が創設者の一人に名を連ねていた。のちにこの全国組織の中で、都市計画における景観の美を優先する立場と効率的な都市機能を優先する立場で対立が生じたことはよく知られている。もつとも、イデオロギー的な差異は別にして、現実の都市計画の実践において両者を区別することは困難であった。例えば、先にみたシカゴ・プランの具体的内容でも、ミシガン湖畔の記念碑公園と市西部を結ぶ大通りの建設や鉄道線路の付け替え・整理などは、パリやロンドンに匹敵する都市景観の構築と、ループ地区の渋滞緩和を同時に追求するものであった。別言すれば、「都市の安寧を脅かす……無秩序と悪徳、そして病」を治癒し、尊厳ある市民性を回復するといったバーナムが掲げたシカゴ・プランの究極目標は、ループから同心円を作りながら放射される物流網が約束する、経済繁栄、そして地域の秩序だった膨張と両立するのだった。<sup>④</sup>

美か？機能か？という建築界の論争に加えて、都市計画と前節でみたスラムの住環境改善運動の関係も重要な問題である。ニューヨークでは、一九〇九年から過密居住反対の運動を本格化したローレンス・ヴェイラー (Lawrence Veiller) らが、景観の美化に重点を置く都市計画運動に反発したし、シカゴにおいても都市社会の限られたリソースを都市計画に集中させることに批判があった。また、バーナムらが私的な住空間にあまり関心を持たなかったのも事実である。「シカゴ

の計画』ではスラム改革について、街路の拡幅と清掃の徹底以外に何も記されていない。また、同書が繰り返し一九世紀パリの設計者ジュールジュ・オスマンに賛辞を贈る一方で、イギリスのイベネザー・ハーワードの労働者の郊外住宅地(田園都市)構想に全く触れられないのは、シカゴ都市計画の性格を知るうえで興味深い。<sup>⑤</sup>

このシカゴの状況は、フェビアン派のキリスト教社会主義者、ウィリアム・D・P・ブリス(William D. P. Bliss)等を中心にイギリス田園都市のアメリカ版を構想したニューヨークとは大きく異なるといつてよい。ただし、将来にわたってシカゴに低所得者向けの住宅供給事業がなかったわけではない。一九一九年には、実業家、ベンジャミン・ローゼンタール(Benjamin J. Rosenthal)がガーデン・ホームズなる安価なモデル住宅を市南部の八七丁目(およそストックヤードとサウス・シカゴの中間地)に建設している。ローゼンタールはヨーロッパ移民労働者の核家族を入居者として想定し、かかる住宅供給が「アメリカ化」の一翼を担うものと自負していた。ガーデン・ホームは当初、テナメント改革者のマクダウェルやシカゴ・プランの事務局を務めたチャールズ・ワッカー(Charles H. Wacker)等を含む幅広い都市指導層からも支持集めたが、一九二一年には資金繰りが悪化し、わずか一七五戸を販売しただけで事業は頓挫した。<sup>⑥</sup>

ローゼンタールの事業に対するワッカーの対応からもわかる通り、シカゴ・プラン運動は、決して低所得者の住宅改善運動を敵視したわけではない。彼らは、むしろ個別の改善運動を可能たらしめる、都市のグラウンド・デザインを追求していたのだった。また、セツルメントや慈善活動の側も、必ずしも都市計画に否定的ではなかった。シカゴ慈善局(CBC)の『協働』は、一九〇七年秋シカゴ・プラン構想の概要を報じたワールド・トゥデイ誌の記事をとりあげ、これを「過密地区に住む貧しい労働階級のために、小公園網を導入し拡大しようとする……誇るべき」計画として評価していた。また、ハルハウス等のセツルメント運動と深い関係にあったシカゴ都市女性クラブ(Woman's City Club of Chicago)も一九〇六年のプロジェクト立ちあげ当初から、バーナムやワッカー等のイニシアティブに信任を与えていた。<sup>⑦</sup>

貧困層の私的空間を対象とするか、あくまで広域の公的空間を構想するか、あるいは、条例等による法規制を目指すか、

はたまた、公共事業を改良の手段とするか、そうした違いがあるとしても、両者はともに衝撃都市が生み出した「都市問題」を物理的な環境の改善によって解決しようとしていた。またその際、F・ハウの言う「都市意識」に呼応するシカゴ全体を対象とする改革構想を持った点でも共通した。『シカゴの計画』は、端的に述べる。「善き市民性こそが、善き都市計画の至高の目的である」と。<sup>⑧</sup>

（二）『ワッカーの手引書』——広報と政治

計画の青写真である『シカゴの計画』が刊行された後、プランはひとつの巨大建設プロジェクトとして実体化を目指す段階を迎える。一九〇九年、商業クラブの勢力は、シカゴ市長に陳情して行政委員会としてのシカゴ・プラン委員会を設置させた。委員会は総数三二八名におよぶ組織であったが、意思決定は一五名の実行委員会（うち二名は商業クラブ会員）にゆだねられた。実行委員会の長には、ドイツ系の酒造業者で、一八九三年シカゴ万博の理事でもあったチャールズ・ワッカーが就任し、以後、実務を取り仕切った。同委員会はのちに常設化し、今日のシカゴ市の一部局、都市計画開発局に発展する。歴史的に見たとき、ワッカーの実行委員会の活動で最も注目すべきは、前例のない市民向けの宣伝活動である。もともと、シカゴ・プランは一都市の財界人が、外部の力を借りずに、あくまで民間の自治的行為として進めていたものであった。だがそれゆえに、当初から、プランは上流階級の専有物であり、また彼らはこの計画からさらなる富を得ようとしているとの憶測もあつた。これに対して、ワッカー委員会は、すべてのシカゴの住民が階級や貧富の差をこえて、この計画から恩恵を受けるけるのであり、全市民が計画へのコミットメントを求められていると主張した。もとより大宣伝の背景には、政治的な問題があつた。プランは結局のところ、公共事業として実施されざるを得ないのであり、いずれ市長の差配のもと、少なくとも市議会の了承を必要とする市債の発行が不可欠だった。そうなれば広範な世論の支持が得られるかどうかは事業の成否に関わる重要事項だったのである。<sup>⑨</sup>

だが、そうした事情を鑑みても、ワツカーがウォルター・ムーディー (Walter D. Moody) という販売マーケティングの専門家を管理ディレクターに任じ、シカゴ広報に関する世論形成の全権をゆだねたことは画期的だった。広報活動は、五百回を越える講演会の企画から映画製作まで多岐に及んだが、中でも注目すべきは、ムーディーが執筆した『ワツカーの手引き』というシカゴ・プランの平易な解説書の出版である。この書物はバーナムの『シカゴの計画』を子供向けに書きなおした内容で、教育委員会を巻き込んだロビイングの結果、市内すべての中学校 (第八学年) で公民科の教科書として採用された。『手引き』もまた、ほぼすべてのページが様々な図版で埋め尽くされており、とりわけ『シカゴの計画』から転載された、いくつもの同心円と放射線で構成される独特の市街図は印象的だ。ループから郊外へ向けて整然と投射されたかのような公園群と道路網、水道システムの配置イメージである。<sup>⑩</sup>

掲載された地図の中には、中西部 (千マイル四方) の鳥瞰図もあった。それは、広大なリージョンの地理の中に都市シカゴの位置を示すものであったが、あくまでシカゴ一極を中心とする一元的な作図——すなわち、中西部五千万人の人口をして、ループを起点に半径百マイル毎に描かれた同心円の構成物とするイメージだった。この教科書が、シカゴの若い市民にある固定されたトポロジーを植え付けたことは想像に難くない。そして、この「大シカゴ」のイメージは、「偉大なるシカゴに対する愛と忠誠心」を喚起するものと期待された。『手引き』は冒頭で、都市計画教育の目的は、「子供たちにこの都市に忠誠を抱いていることを確信させ」、「彼らに」シカゴが将来も偉大であるよう尽力する責任を感じさせること<sup>⑪</sup>だと書いた。先に見たように、都市の環境改善と市民意識を結びつける思考は、バーナムの『シカゴの計画』にも見られたものであった。しかし、計画の普及 (市民形成) を新しい宣伝技術、あるいはセールスマンシップに依って実践し、さらには公教育をも媒体として広く一般民衆レベルにまで浸透させたムーディーの手法は、一九世紀ボザールの都市芸術を継承するバーナムのロマン主義的側面とは異質であった。ここに都市計画における新しい世代の専門家の台頭を見ることが出来る。一九一二年、末期がんを患っていたバーナムはこの世を去り、その一方、『ワツカーの手引き』は、一九

一〇年代、二〇年代をとおしてシカゴ公立中学の必修教材となった。

- ① Daniel H. Burnham and Edward H. Bennett, *Plan of Chicago* (Chicago, 1909), xvi-xviii; ハカチ・ブナムを扱った最近の研究は「*Chicago 1909*」 Carl Smith, *The Plan of Chicago: Daniel Burnham and the Remaking of the American City* (Chicago, 2006); Laura E. Baker, "Civic Ideals, Mass Culture, and the Public: Reconsidering the 1909 Plan of Chicago," *Journal of Urban History*, 36, no. 6 (2010): 747-770.
- ② Burnham and Bennett, *Plan of Chicago*, esp. maps and diagrams on page 41, 76, 77.
- ③ Smith, *The Plan of Chicago*, 22-23; 中島直人「アメリカ近代都市計画成立期における『芸術委員会運動』に関する研究」『日本都市計画学会 都市計画論文集』三九・三（二〇〇四年）八七七-八八二頁。
- ④ Julian C. Chambliss, "Perfecting Space: J. Horace McFarland and the American Civic Association," *Pennsylvania History*, 77, no. 4 (2010): 486-497.
- ⑤ *Proceedings of the First National Conference on City Planning* (Washington D. C., 1909); Jon A. Peterson, *The Birth of City Planning in the United States, 1840-1917* (Baltimore, 2003), 205-206, 213-216; Burnham and Bennett, *Plan of Chicago*, 48; Baker, "Civic Ideals," 752-753.
- ⑥ Peterson, *The Birth*, 232; Burnham and Bennett, *Plan of Chicago*.
- ⑦ Peterson, *The Birth*, 235; Thomas Lee Philipott, *The Slum and the Ghetto: Neighborhood Deterioration and Middle-Class Reform, Chicago, 1880-1930* (New York, 1978), 228-243.
- ⑧ John Rothwell Slater, "Making A City into a Metropolis," *The World To-Day*, 3, no. 3 (Sept. 1907): 884-892; "The New Chicago," *Co-operation*, 7-41 (Oct. 12, 1907): 343-344; Abu-Lughod, N. Y., *Chicago*, 43.
- ⑨ Burnham and Bennett, *Plan of Chicago*, 123.
- ⑩ Smith, *The Plan of Chicago*, 114-125.
- ⑪ Walter D. Moody, *Wacker's Manual of the Plan of Chicago* (Chicago, 1911), 76, 81, 83.
- ⑫ *Ibid.*, 2-3, 101, 112, 145.

#### 第四章 権力の所在

##### (一) 集権化

都市計画運動で活用された政治手法——すなわち市の行政機関を拠点に専門的テクノクラートに改革の実務を委任し、集権的に問題解決をはかろうとするやり方——は、スラムの住環境改善運動でもますます重要になっていった。具体的には、

市の公衆衛生局長のポストがひとつの争点になっていた。ハルハウス・グループは、一九〇二年テナメント条例の効率的な運用を目指して、ヴェイラー派の反過密運動家で、ニューヨーク市のテナメント局長を務めたチャールズ・ポール(Charles Paul)を招聘しようとしていた。だが、こうした動きは既存の政治システムとの紛争を惹起せざるを得なかった。なぜならそれは猟官の伝統のもと、地域のボスが人事を壟断するワード制政治を否定するものだったからだ。ポールは一九〇七年になってようやく着任できたが、その後もアダムズらとマシン政治との対立は続く。<sup>①</sup>

ところで、近年のアメリカ都市史研究には、従来のボス政治に対する否定的なイメージの再考を促すものが多く出ている。ボス政治はたとえそれが不正と汚職の温床だったとしても、特に新来の移民に対しては住居や雇用(公務員への任用)を手配するなど、都市社会の中で最低限度の福祉を提供する主体であった。つまり、清廉な改革者と腐敗政治の象徴たるボスを対比する歴史叙述は、それ自体、進歩主義的歴史観のバイアスにとらわれているのだと。とはいえ、実のところ両者は、都市の空間編成をめぐって熾烈な闘争を繰り広げていた。ワードの小宇宙をバターナリズムで支配するボスに対し、改革者は地縁・階級を越えたより広域のネットワークで対抗しようとしていた。一例をあげるなら、ハルハウスやシカゴ大セツルメントの勢力は、シカゴ・メトロポリス全域に、無数の女性クラブを運営し、強固な女性人脈を築いていた。彼女等はあえてジェンダー的表現で、自らの活動を「都市の家政(municipal housekeeping)」と呼んだ。セツルメントは、スラム近隣に移民や労働者からなるコミュニティを再生する一方で、都市全体レベルでの民主的な市民紐帯の構築を目指していたのだ。シカゴ女性クラブの会員数は一九一五年までに二千八百人に達する。<sup>②</sup>

加えて言えば、このセツルメントの都市改革空間は、多くの移民が自明視していた民族的、宗教的な都市空間認識とも相容れないものがあった。例えば、最大のエスニック集団であるポーランド人等のカトリック移民は、シカゴ定住後も数世代にわたってひとつの地縁共同体でもある教区の中に暮らした。教区は本来、枢機卿管区が定める「領域」であるが、二〇世紀初頭のシカゴでは、しばしば、その領域教区内に母語集団ごとに細分化された「民族教区」が設立された。民族



教区は、移民の精神生活だけでなく、相互扶助や独自の社会福祉（特に孤児院運営）を支える基礎的なソシアリティを成しており、彼らは教区の「地理的」境界をアメリカ人やその他の民族・人種集団から「防衛」することに集団アイデンティティの意味を見出していた。それは、シカゴ・プランの膨張的な同心円図とも、政治ボスのワードとも、セツルメントの近隣コミュニティや市民ネットワークとも、異なる空間理解だった。<sup>④</sup>二〇世紀初頭のシカゴには、大きさも編成原理も異なる複数の想像の共同体が並立していたようにも見える。

そうした多様な人々が織りなす多元的な空間はあるひとつのものを共有せざるを得なかった。それは政治である。行政委員会の人事や条例による規制、さらには公共事業としての都市計画、そのいずれもが市長職をはじめとする政治のリリース配分に依存した。実際、アダムズを中心とする改革者グループもまた、「科学的行政」を求める一党派として市政に参入し、チャールズ・メリアム（Charles Merriam）シカゴ大教授（政治学）を幾度となく市長選挙に擁立している。しかし、彼らが市政に多数派を形成することはない。一九一五年、一九年の選挙でメリアムが後塵を拝したのは、共和党の保守政治家ウィリアム・H・トンソン（William H. Thompson）であった。<sup>⑤</sup>

トンソンは、元来、イリノイ州共和党の有力者、ウィリアム・ロリマーに師事したボス政治家であった。だが、彼はワードごとに分裂した党内利害の調整を得意とせず、大規模な政治連合の形成に長けていた。初当選を果たした一九一五年の市長選挙では、反イギリス帝国の主張を行って、ドイツ系とアイルランド系住民から集票し、同時にサウスサイドの第二区、すなわちブラックベルトをも票田としていた。新市長は、当時KKKを美化して人気を博した映画『国民の創生』の上映を禁止するなど、南部からの黒人移住者にも配慮を怠らなかつた。トンソンはその古い「政治屋」のイメージにもかかわらず、きわめて二〇世紀的な都市指導者ともいえた。ある伝記作者は、その政治力の源泉は、祝祭と公共事業にあったとした。例えば、当選直後の一五年四月、トンソンは「繁栄パレード」なるイベントを開催している。七万人によるループ地区の練り歩きのクライマックスには、まだ珍しかった自動車七千五百台の隊列が登場し、三五万人

を越える観衆を熱狂させた。また市長は、シカゴ・プランのワッカー委員長との関係を深め、同プランを市債発行にもとずく大規模公共事業として育て上げた<sup>⑥</sup>。集権的な都市行政と市民意識の醸成、その点において彼は、同時代のセツルメントや都市計画者と価値を共有していた。だが、都市の自治、あるいは、都市の統合を印象付けるこの潮流は、外的な権力（＝国家）との関係の中で、複雑な含意を帯びるようになる。その背景には、第一次大戦とアメリカの参戦があった。

## （二） 戦 争

第一次大戦下、特に東部のメディアは、シカゴを忠誠心の疑わしい都市と見ていた。それは、一五年にJ・アダムズ等シカゴの女性知識人が、女性平和党を結成して反戦を訴えたこと、そして同年誕生したトンブソン政権が明らかにドイツ系やアイルランド系など反協商国陣営の世論を顧慮するものだったことがある。もともと、機を見るに敏なトンブソンは、全国的に軍備運動 (Preparedness) が最高潮に達した一六年六月三日には、シカゴでも得意の祝祭政治に市民を動員して大愛国パレードを主催している。その日、シカゴ・プランの再開発に着手したばかりのミシガン湖岸、グランドパーク・エリアを一三万人が星条旗を手に行進した<sup>⑦</sup>。しかし、その愛国的外観にもかかわらずトンブソンのシカゴ市政の戦争へのスタンスはやはり微妙であった。ウイルソン政権が対独宣戦を行った一九一七年四月には、同盟国フランスの將軍ジョゼフ・ジョフルがシカゴを訪れた際、トンブソンが正式な招待状を出さなかったという事件が起こっている。ニューヨーク・タイムズの報道によれば、トンブソンはその理由を「シカゴは世界で六番目にドイツ人が多く住む都市」だからだと述べたという。同紙はこのコメントを受けて、「シカゴはアメリカの都市ではないような印象を与える」と書いた<sup>⑧</sup>。また、その後も市長は細かい内規の定めを盾に戦時公債の市庁舎での販売を禁止して批判を受けている。さらに、同年九月には、平和主義団体「民主主義と平和のためのアメリカ人民協議会 (People's Council of America for Democracy and Terms of Peace)」が市内で大会を開くのを黙認し、物議をかもしだした。同協議会の会合は中西部中で拒否されていたからである。

総力戦の名のもとに愛国主義が席卷する当時のアメリカにあって、シカゴには独特の政治環境があったように見える。例えば、ナシヨナリズムの高揚を背景に、戦後、ニューヨークをはじめとする多くの北部都市で、外国系住民から投票権を剝奪する識字テストが導入されるが、シカゴではそうした事態は起こらない。戦時下になおこの都市では、ドイツ系のワッকারのような旧移民が影響力を保持できる状況があった<sup>⑧</sup>。

だが、そのことはシカゴのエリート全体が戦争努力に消極的だったことを意味しない。シカゴを拠点とするイリノイ州の国防会議（Council of National Defense）は、この半官半民の戦争動員機関において、全国運動を主導する「旗手」であった。そして、その中心人物は第二章でふれたハルハウスのルイーズ・ポーエンだった。ポーエンは、一九一七年春に国防会議運動に賛同し、自ら国防会議女性委員会の設立に尽力した。この組織の求心力は凄まじく、州全体で約七〇万人の女性を戦争協力者として登録することに成功している。重要なのは、ポーエンが同委員会を立ち上げる際、マクダウエルやアダムズとともに育成してきた女性クラブのネットワークを新しい愛国運動のエージェントとして組み込んだことである。実際、州国防会議の下部組織となった女性クラブの活躍は、特に児童福祉と社会衛生の分野で目覚ましく、青少年の「建設的な娯楽」の実地指導と公衆衛生に関する講演活動のために、三百人の講師を育成したのだった。こうしたポーエンのイニシアティヴは、レイモンド・フォスティック（Raymond B. Fostick）の訓練基地委員会（Commission on Training Camp Activities）やYMCAの活動と呼応するものとして評価され、戦後のイリノイ州社会衛生部公衆衛生局の設立につながる流れを生み出した。このように、都市改革と道徳秩序、医療・公衆衛生、そしてナシヨナリズムが一体化していく可能性については、第一章でもふれたところである<sup>⑩</sup>。

ところで、戦時下にポーエンが推進した、広域の統合的な公衆衛生行政は、セツルメントの都市改革者が待望してきたものでもあった。だが、それがもはや民主的な都市意識に立脚した自発的な運動でないことはあきらかだった<sup>⑪</sup>。そして、シカゴのテナメント改善運動は、深刻な分裂状態に陥っていった。アダムズは婦人国際平和自由連盟（Women's

International League for Peace and Freedom) など国際的な平和運動に力を割き、その一方で、都市住宅協会 (C H A) のハインターは戦争支持を表明してラディカリズムから離脱し、女性クラブは愛国運動に吸収されてしまった。都市改革の主流は、次章で見る、新しい世代の専門家や研究者の学術調査に移りつつあった。

いずれにせよ、戦時ナショナリズムによる都市アイデンティティの解体は多方面で進んでいた。自由の気風を誇ったシカゴのアメリカ化運動さえも愛国的色彩を帯び始めた。ハリス信託貯蓄銀行のアルバート・ハリスを中心とするシカゴ財界人のグループは、ストックヤードの J・O・アーマラーの力を借りて、シカゴ・コミュニティ・トラストなる民間基金を立ち上げ、大規模な戦時アメリカ化運動を組織している。この運動は、市内の各コミュニティに愛国センターを設立し、夜間の学習会等をおして共同体意識と国家忠誠を涵養しようとするものだった。「天命の都市」シカゴを構成したはずの無数のコミュニティは、今や国家の基礎構成単位として動員されつつあった<sup>⑫</sup>。

都市計画の分野でも、「都市」は国家への従属を深めていた。象徴的だったのは、全国都市計画会議 (NOCU) が、軍事目的の住宅建設に積極的に協力したことである。同会議は戦争協力のためにアメリカ都市計画研究所 (American City Planning Institute) を新設し、オルムステッドが長となった。この都市美化運動の重鎮は、戦時を通じて新兵用の兵舎の増築に尽力し、戦時連邦造船局などの数十におよぶ労働者用住宅地を設計したのである。その他にも、シカゴ・プランのオリジナルメンバーで、『シカゴの計画』の共著者でもあったエドワード・ベネット (Edward H. Bennett) は、イリノイ州キャンブ・グラントの造成に都市計画のノウハウを与え、ニューヨークのテナメント改革者 L・ヴェイラーは、陸軍省に協力して兵舎の適正収容人数を助言していた<sup>⑬</sup>。

シカゴでも都市計画は愛国を求められた。ワッカーは戦時の資材難の中でシカゴ・プランをフォートシェリダンとシカゴさらに五大湖海軍訓練基地を結ぶ軍事的事業だと説明しなくてはならなかった。ともあれ戦争中も、シカゴ・プランは継続され、一七年一二月に一二丁目の拡幅工事が、二〇年までにミシガン通りの架橋が完成した。トンソン市長は、不

忠誠問題を覆い隠すかのうちに、公共事業に精力を傾けたのであり、バーナムが残した都市計画は格好のシナリオを提供していた。一九年四月の市長選挙でトンソンは地滑りの勝利をおさめた。戦時国家による都市動員は、文化的な意味での都市意識を破壊しつつも、行政体としての市政の膨張と一元化を妨げるものではなかった。<sup>⑩</sup>

- ① Jane Addams, "Why the Ward Boss Rules," *The Outlook* 57 (April 2, 1898) : 879-82; Abbott, *The Tenement* 61-68.
- ② Bruce M. Stave, "Introduction," Stave ed. *Urban Bosses* vii-xvi ; 田中郎「報市」アメリカ学舎訳編『原典アメリカ史 社会史史料集』(築波書房 二〇〇六年) 一五四-一六四頁。
- ③ Maureen A. Flanagan, "Gender and Urban Political Reform: The City Club and the Woman's City Club of Chicago in the Progressive Era," *American Historical Review*, 95, no. 4 (Oct. 1990) : 1032-50 ; Caroline Miles Hill, *Mary McDowell and Municipal Housekeeping: A Symposium* (Chicago, 1938).
- ④ Dorothy Brown and Elizabeth McKeown, *The Poor Belong to Us: Catholic Charities and American Welfare* (Cambridge, Mass., 1997), 58-59 ; McGreevy, *Parish Boundaries*, 7-28.
- ⑤ Douglas Bukowski, *Big Bill Thompson, Chicago, and the Politics of Image* (Urbana, 1998), 75-79.
- ⑥ *Ibid.*, 10-60 ; Allan H. Spear, *Black Chicago: The Making of a Negro Ghetto, 1890-1920* (Chicago, 1967), 187-189 ; *New York Times*, April 27, 1915.
- ⑦ *Chicago Daily Tribune*, June 4, 1916.
- ⑧ *New York Times*, Apr. 29, 1917.
- ⑨ *New York Times*, May 23, 1917 ; *Chicago Daily Tribune*, Sept. 2, 1917, Sept. 21, 1917 ; 中野耕太郎「浄化される民主主義——『人民』から『国民』へ」常松洋、肥後本芳男、中野耕太郎編『アメリカ合衆国の形成と政治文化——建国から第一次世界大戦まで』(昭和堂、二〇一〇年) 一五四-一七九頁。
- ⑩ William J. Breen, *Uncle Sam at Home, Civilian Mobilization, Wartime Federalism, and the Council of National Defense, 1917-1919* (Westport, Conn., 1984), 137-156 ; Americanization Department Woman's Committee, Council of National Defense Illinois Division, *Citizens' Almanac* (Chicago, 1919) ; CTCAC の 5 月 14 日の文獻を参照。松原宏之「第一次世界大戦期アメリカの性病管理とアメリカ国民意識」樋口映美、中條訳編『歴史のなかの「アメリカ」——国民化や多文化の創造』(彩流社、二〇〇六年) 九三-一〇〇頁。
- ⑪ Women's Committee of the Council of National Defense, *The Bulletin*, No. 1 (1917).
- ⑫ Chicago Community Trust, *Americanization in Chicago: The Report of a Survey* (Chicago, 1920).
- ⑬ *Proceedings of the Tenth National Conference on City Planning*, (St. Louis, May 27-29, 1918), 86-106, 117-121, 144-145.
- ⑭ *Chicago Daily Tribune*, Aug. 3, 1917 ; Bukowski, *Big Bill*, 67-68, 110.

第一次大戦期の政治経済は、すでに一九一〇年頃には芽生えていた都市改革の一般的傾向——専門家ないしはエンジニア的手法と都市規模での行政的対策——を助長する面を持ったが、他方、新しい不安定要素を生み出してしまった。ひとつは、人口構成に関わる変化であった。戦時下に、ヨーロッパからの移民が停止する一方で、約六万人の南部黒人が食肉加工等の軍需関連産業に職を求めて流入し、シカゴの黒人人口は一万人近くになった。黒人の増加は一九二〇年代をとおして継続し、三〇年には二三万人を越える<sup>①</sup>。この現象は、シカゴの人種・エスニック関係に新たな緊張をもたらしていた。今ひとつの不安定要素は、右の問題とも関わるが、戦争が惹起した暴力と民族主義の感情が、都市意識が希薄化する中で、噴出しはじめていたことである。シカゴの外国系人口が一九二〇年になお一九五万人に及んだことを考えると、その影響は計り知れない。事実、戦争直後の時期には、人種、民族に関わる暴力事件が頻発し、都市秩序は大きく動揺したのだ。こうした中で、新興の専門家や研究者の間では、新しい都市観——すなわち、都市内部を制度的に区画化することで、諸集団の流動、衝突を最小化しようとする思考が広がっていく。そのように分画化 (Zoning) された新しい都市イメージを、本稿では「ズーン都市」と呼ぶ。以下、戦後の状況をやや具体的に見ていこう。

すでに、終戦間もない、一九一九年春までにシカゴのエスニック集団間の関係は極度に悪化している。移民の中でも、この戦争を祖国の独立ないし再生の機会と見ていたポーランド人やユダヤ人、アイルランド人等の集団は、祖国ナシヨナリズムに大規模に動員されてきた。そのことが紛争の背景にあった。一九一九年五月には、ユダヤ系住民、二万五千人がグループで、新生ポーランドにおけるボグロムに抗議するデモを行った。これに対し翌六月にはポーランド人側が報復の構えを見せ、ウェストサイドの一二丁目まで八千人の両民族がにらみ合い二五〇人の警官が出動する事態となった<sup>②</sup>。また、七月中旬、アイルランドから民族主義者のイーモン・デヴァレラがシカゴを訪れると、二万五千人のアイルランド系市民が

独立運動を支持して野球場での講演会に殺到した<sup>③</sup>。そして、この二週間後の七月末には、アメリカ史上最悪の人種暴動がサウスサイドで勃発した。暴動の中で、三八名（うち三名が黒人）が殺害され、五三七名（三四二名が黒人）が負傷、約千人が家屋を焼失した。騒擾の首謀者は、アイルランド系二世のギャング集団であったとされる。犠牲者の多くは、ブラックベルトから白人高級住宅地の、ハイドパークやケンウッド近くに転入した黒人中産階級だった<sup>④</sup>。

シカゴの財界エリートや都市改革者は、こうした混乱の本質を再び都市環境の問題に求めた。暴動直後の一九年八月、セツルメント運動のマクダウエルやリベラル派財界人J・ローゼンウォルド等は、設立間もない都市連盟（Chicago Urban League）とともに、シカゴ人種関係委員会（Chicago Commission on Race Relations）を組織し、暴力の原因究明と再発防止策の策定にあたらせた。人種関係委員会は、二一年十二月、二年をこえる調査を終えて最終報告書をまとめている。そこで重点が置かれた議論は、戦争中に南部から移住した貧しい黒人の住宅問題だった。報告書によると、四三%のシカゴ黒人が「ほとんど住むに値しない……荒れ果て、崩れ落ちそうな」アパートに暮らしている。そして、移住者の増加にともなう住環境の悪化とスラムの膨張が、黒人中産階級の白人地区への転出を促し、暴動を惹起したという。人種関係委員会が解決策として、「強制的な」人種隔離を支持することはなかったが、スラムの膨張と黒人人口の流動化が問題の根本にあると考え、「調和を欠いた土地利用からくる不動産の荒廃を防ぐべく」一般的なゾーニングの必要を示唆していた<sup>⑤</sup>。

このような報告書の叙述には、一九一〇年代に発展した社会科学者による都市調査運動の影響が濃厚に看取される。ここでいう都市調査とは、特定の都市全体を包括的にカバーするフィールドワークで、地域の産業や住民の生活実態について数量的な評価を行い、さらにそれに基づいてある種の社会行動を説明する営みをいう。そうした都市レベルでの包括的な調査は一九〇九年のピッツバーグで、経済学者のジョン・コモンズらが従事したものが代表的で、その後全米の都市に広がった。シカゴでは、第一次大戦直前の時期から、元ハルハウスのレジデントでシカゴ大学社会福祉学部のエディス・アボット（Edith Abbott）とソフォニスバ・ブリッケンリッジ（Sophonisba P. Breckenridge）のグループが広範囲の環境調査

を試みていた。彼女らの調査は、当初ストックヤード等、シカゴ全域の移民労働者地区からはじめまり、一九一二年にはブラックベルトの過密問題にもメスを入れた。<sup>⑥</sup>

この時期の都市調査運動については、その学術研究としての未熟さを指摘する声もある。社会学者マーティン・ブルマーは、この運動がのちのより客観的な社会学調査とは異なり、目的論的でジャーナリスティックな性格が強かったと批判する。たしかに、ブリッケンリッジ等の調査報告でも、過密と道徳的墮落の関係が繰り返し強調されるなど、ある種の「旧さ」が散見される。<sup>⑦</sup>だが、それでもなお、世紀転換期の『ハルハウス地図』や都市住宅協会の『テナメント状況』と比較すると、はるかにシカゴという都市全体の構造を統計的、科学的に分析しようという姿勢が顕著である。

都市アカデミズムの新しい潮流は、戦中、戦後のシカゴ学派社会学の隆盛によってさらに先鋭なものとなる。一九一三年にシカゴ大学社会学部のファカルティに加わった、ロバート・パーク (Robert E. Park) はこれまで南部のブッカー・T・ワシントン黒人向上運動を秘書として支えてきた人物で、一九一六年、ローゼンウォルドの資金援助を受けて、南部からの黒人移住者の支援を目的とするシカゴ都市連盟を創設した。一九年の人種暴動後、パークと都市連盟は、前出の人種関係委員会の発足に主導的役割を果たし、シカゴ大パーク研究室の大学院生だったチャールズ・ジョンソン (Charles Johnson) を執行書記に就任させるなど、同委員会の調査活動、報告書作成に絶大な影響力を発揮したのだった。

おそらく本稿との関連で重要なパークの学風は、彼の都市生態学であろう。一九二二年にアーネスト・バージェス (Ernest W. Burgess) との共著で刊行した『科学としての社会学序説』は、自然環境への適・不適により植生が変化する植物生態のメタファーから、都市の人間行動を説明する画期的な議論を含んでいた。ここで彼が問題にしたのは異なる階級、文化、人種の「住み分け」とその境界の流動性である。境界線上では常に新たな侵略と紛争が起こり、やがては都市社会の「植生」も変化していく。そうした見方は、都市の景観や住環境と市民性や道徳秩序とを結びつけた旧来の都市認識とは趣を異にするものであった。何よりもパークは民族や人種によって規定される第一次集団をリアルな存在として重



視した。そのため、彼は都市全体を俯瞰する客観的な視点を保ちながらも、都市空間が多層的構造に分画されることを当然視する。それは道徳的な環境主義や「都市意識」論とは一線を画した、社会科学の都市観だった。<sup>⑤</sup>

『序説』のもう一人の著者、バージェスは助教時代の一九一六年、マサチューセッツ州ローレンスの都市調査に参加した経験を持つ若手研究者で、二五年には、やはりパーク等との共著『都市』において、あまりにも有名な都市ゾーンモデル図を発表したことで知られる。それは中心部のループから外へ向けて円環状に都市が複数の異なるゾーン——すなわち遷移帯（スラム）、労働者居住区、中産階級宅地、郊外住宅地、で構成されるイメージだった。各ゾーンは、内側の集団が外側の集団を侵攻することで常に不安定な状態にあるとされ、そうした都市空間の流動性を示唆するものとして遷移帯（zone of transition）なる危険領域が明示されていたのである。<sup>⑥</sup>

バージェスの同心円図は、近年、特に都市・郊外関係を専門とする都市研究者などから、その恣意性、不正確さが指摘されている。また同時に、この地図のインパクトがあまりにも強く後代の都市研究者の都市イメージを縛り続けてきたことに批判の目が向けられてもいる。<sup>⑦</sup>つまり、バージェスの「想像の同心円」そのものが持つ歴史性、イデオロギー性も考慮されなくてはならない問題なのである。その意味で、バージェス・モデルのルーツを、一九世紀末以来、シカゴで何度も作成されてきた不動産開発用の同心円図に求める都市史研究者エレン・ルイネックの指摘は興味深い。<sup>⑧</sup>たしかに、本稿でも見てきたように同心円の描かれた地図は、一〇年以上前の『シカゴの計画』や『ワッカー手引書』の中でも、頻繁に活用されており、ループの中心性、都市の多元性と膨張のダイナミズムが表現されてきた。

そして、同時代の歴史文脈に照らしてより重要なのは、バージェスとシカゴ学派における遷移帯の表象であろう。民間対立が常態化し、大規模な人種暴動を経験した第一次大戦後のシカゴにおいて、遷移帯は都市秩序の脅威であった。人種関係委員会報告の言葉を借りれば、遷移帯の「調和を欠いた土地利用」が不動産価値を低落させ、さらなる暴力を予感させる。つまりバージェスの研究における遷移帯の可視化には、都市ゾーニングと事実上の人種隔離を正当化する論理が

含まれていた。<sup>18)</sup> 実際シカゴでは、第一次大戦中から大手不動産業の業界団体、シカゴ不動産委員会が条例による人種ゾーニングを強く市議会に働きかけていた。条例による居住区の人種隔離自体は、一九一七年の連邦最高裁で否決されるが、その後もかたちを変えて、都市を同質的な幾つかのゾーンに分離、編成したいという願望は持続する。興味深いのは、そうしたゾーニング運動の中にシカゴ都市計画の人脈が散見されることである。一九二一年、トンブソン市長が設置した市ゾーニング委員会にはC・ワッカーの名前が含まれていた。二三年には、連邦の都市区画授權法の成立を受けて、この委員会の勧告にもとづくシカゴ初のゾーニング条例が成立する。それは建物の高さ、間口の広さを管理する、特定地区の物理的環境の保全策であった。そして実際に条例案を起草したのは、『シカゴの計画』の共著者、E・ベネットであった。<sup>19)</sup> 付言すべきは、既存の住環境改革者の立ち位置である。シカゴ大セツルメントのマクダウェルは、二〇年代に入ってもモデル・テナメントや公営住宅の運動を続けていたが、建物環境の公的規制としてのゾーニングに否定的ではなかった。また、ローゼンウオールドは二〇年代後半に、「ミシガン通りガーデン・アパートメント」という住宅供給プロジェクトを立ち上げている。だが、その立地はブラックベルト内の四六丁目であり、入居者として想定されたのは黒人中産階級であった。それは人種関係委員会が示唆した強制的ではない隔離としてのゾーニングを容認するものだった。この問題はいわゆる制限的約款制度の導入によって、さらに深刻な意味を持つようになる。それは、一七年判決を迂回すべく、民間の不動産契約（コミュニティ全体をカバー）に、黒人への譲渡、売却を認めない約款を付帯させる制度だった。標準となる約款案を作成したのは、ノースウエスタン大学の法学者、ネイサン・マックチェスニー (Nathan W. MacChesney) だった。彼もまたシカゴ・プラン執行委員の一人であった。総体性をもった都市デザインを追求してきたはずの都市計画者は、今や都市の人種的な分画化を推進する役割を担っていた。制限約款は瞬間に市内全域に広まっていく。かつてB・ローゼンタールが移民低所得者用に分譲した八七丁目ガーデン・ホーム（二一年に建設を中断するも、既入居者を中心に残存）のような労働階級の小コミュニティまでが、二九年には同約款を採択している。物質的な建造環境基準によるゾーニング条例と

不動産制限約款の組み合わせにより、二〇年代後半までにシカゴには「事実上の」人種隔離が成立した。ここに現出した都市の空間秩序は、少なくとも一九六〇年代中葉まで継続するだろう。<sup>⑭</sup> 衝撃都市を生きたるなかで構想された統合的な都市意識はすでに瓦解し、分断された空間がアメリカ都市の「自然な」現実として受け入れられていった。

- ① U. S. Bureau of the Census, *Fourteenth Census*, Vol. 2 (1920), 51.
- ② *Narod Polski*, May 28, 1919, Chicago Foreign Language Press Survey, Federal Work Agency, Work Projects Administration, 1936-1941; *Chicago Daily Tribune*, June 8, 1919, June 9, 1919; *Dziennik Zwyczajowy*, June 27, 1919 (CFLPS); 戦争中心在米ポーランド人のナショナリズムについて、以下の文献を参照。中野耕太郎「祖国ナショナリズムとアメリカ愛国——シカゴのポーランド移民——」樋口映美、中條敏編『歴史のなかの「アメリカ」——国民化をめぐる語と意識』（後編社）二〇〇六年）二四七-二七三頁。Andrzej Kapiszewski "Polish-Jewish Conflicts in American during the Paris Peace Conference: Milwaukee as a Case Study", *Polish American Studies* 49, no. 2 (Autumn, 1992): 5-18. 参照(シカゴ)。
- ③ *Chicago Daily Tribune*, July 15, 1919.
- ④ William M. Tuttle, Jr., *Race Riot: Chicago in the Red Summer* (Urbana, 1970).
- ⑤ 中野耕太郎「二十世紀国民秩序と人種の暴力——一九一九年シカゴ人種暴動の検討」、『歴史科学』第二〇〇号(二〇一〇年)五二-七〇頁。The Chicago Commission on Race Relations, *The Negro in Chicago: A Study of Race Relations and A Race Riot* (Chicago, 1922), 191-92, 196.
- ⑥ Sophonisba P. Breckenridge and Edith Abbott, "Housing Conditions in Chicago, III: Back of the Yards", *American Journal of Sociology*, 16, no. 4 (Jan. 1911): 433-468; Alzada P. Comstock, "Chicago Housing Conditions. VI: The Problems of Negro.", *American Journal of Sociology*, 18, no. 2 (Sept. 1912): 241-257.
- ⑦ Martin Bulmer, "The Social Survey Movement and Early Twentieth-Century Sociological Methodology," in Maurine W. Greenwald and Margo Anderson, ed., *Pittsburgh Surveyed: Social Science and Social Reform in the Early Twentieth Century* (Pittsburgh, 1996), 15-34.
- ⑧ Robert E. Park and Ernest W. Burgess, *Introduction to the Science of Sociology* (Chicago, 1921).
- ⑨ Ernest W. Burgess, "The Social Survey: A Field for Constructive Service by Departments of Sociology", *American Journal of Sociology*, 21, no. 4 (Jan., 1916): 492-500; Burgess, "The Growth of the City: An Introduction to a Research Project," in Robert E. Park, Ernest W. Burgess, Roderick D. McKenzie, *The City* (Chicago, 1925); バージェスの研究全般については、西川知幸「E・W・バージェスの社会政策論——社会改良・計画・福祉の展開」『京都女子大学現代社会研究』一〇五-一七頁を参照(シカゴ)。
- ⑩ Richard Harris and Robert Lewis, "Constructing a Fault(y) Zone: Misrepresentations of American Cities and Suburbs, 1900-1950", *Annals of the Association of American Geographers*, 88, no. 4 (Dec. 1998): 622-639.

- ① Elaine Lewinnek, "Mapping Chicago. Imagining Metropolises : Reconsidering the Zone Model of Urban Growth," *Journal of Urban History*, 36, no. 2 (2010) : 197-225.
- ② Ibid. : 208-209.
- ③ Smith, *The Pain of Chicago*, 132; Philpot, *The Sunn*, 162, 246-47.
- ④ Ibid., 189-191, 242, 248-252, 260-263 ; St. Clair, Drake and Horace R. Cayton, *Black Metropolis : A Study of Negro Life in A Northern City* (1945 ; Chicago, 1993), 179-184 ; Boyd, *Jim Crow Nostalgia*, 21-24.

## む す び

以上の検討を要約すると次のように書くことができよう。衝撃都市に生まれた二〇世紀シカゴの都市改革は、先行する世代の環境主義、わけても公衆衛生への高い感度を引き継ぎつつ、都市環境をすこぶる社会的なものと見た点で特徴的だった。それは、テナメントの内部設備や過密の度合いといった私的空間と、街路の景観や公園といった公共空間の双方について、能動的なコミットメントを推奨する知的潮流だった。また、そうしたコミットメントを基礎づける前提として、階級的な「二分化」を放置せず、都市を統合的な有機体と見る視点が確保されていた。この都市認識上のブレイクスルーは、建築基準を厳格化した諸条例の制定を実現するなど、シカゴの建造環境に一定の影響を与えた。

だが、スラムの住人を含めて自己の一部とみならず「社会化された都市」は、逆説的に彼らを内的な「病」として他者化し、隔離するメカニズムを含みもっていた。病原体のイメージが付きまとった貧者や移民、有色人などは、社会統制と監視の対象となり、彼らが都市空間内を流動すること自体が、潜在的に主流社会に危機の感覚を惹起するのだった。この傾向は、人種・エスニック紛争が激化した第一次大戦後にさらに拡大し、「ゾーン都市」を求める社会的素地を成した。

二〇世紀前半のアメリカ都市はまた、都市内部の小共同体との関係、都市外部の国家との関係の双方において、激動を経験した。まず、一般的傾向として、都市改革における専門家・研究者の調査・助言の重要性がますます増大し、都市内部のワード政治や猟官制は次第に力を失いつつあった。シカゴ・プランの広報担当ムデーや都市調査のブリッケンリ

ッジ、社会学者R・パークなどはそうした専門家の先駆者と言えよう。他方、第一次大戦期を最初の頂点として、国家が都市生活に介入する度合が増えつつあった。それは、都市をひとつの完結した世界として感じ、その団結を称揚するタイプの改革言説を後退させた。だが、戦時に肥大化した国家権威は改革のリソースともなりうる。シカゴ・プランも公衆衛生運動も戦争政策に適合する限りで一定の成果を上げた。それは市長の権能についても当てはまる。トンブソン市長は、国家から様々な圧力を受けながらも、市政の一元的統治を進めることができた。

だが、総力戦が都市アイデンティティを侵食したことは、戦後のシカゴに剥き出しの人種・エスニック対立を招く一因になった。また、先述の都市改革に内包された他者創出のメカニズムは、民間暴力によってさらに増幅されていく。こうした背景をもつ一九二〇年代の都市政治においては、新しい都市秩序観にもとづくゾーニングがひとつのキー概念となった。ゾーニング推進派に、かつてシカゴ・プランに集った都市計画家が多く参入した事実は、緩やかなパラダイム・シフトが進んでいたことを窺わせる。そこには、むしろ「分離」することで効率的に秩序を構築しようとする社会工学的な統治の発想があり、そうした都市認識は新興の都市社会学者の多くも共有するところであった。バージェスの同心円は、まさに、この秩序観を説得的に普及する装置として機能した。

その後、都市の環境、住宅政策はニューディール期に連邦の管掌するところとなり、都市行政のプレゼンスは相対的に低下する。しかし、バージェス理論の信奉者の多くが、三〇年代以降も連邦住宅局などの国家機関に加わるなど、「ゾーン都市」の影響力は永続的ですからある。そして、我々の都市をめぐる学知もまた、衝撃都市からゾーン都市へというコンテキストと無縁ではないだろう。冒頭で引いたワーナーの『ストリートカーの郊外』で多用される扇状の同心円図は、バージェス・モデルに都心と郊外を結ぶ動線を書き加えたものにも見える。そしてそれは、シカゴ・プランが描いた湖岸（ループ）と市西部の郊外を結ぶ一二丁目再開発の図とも似ている。さらに言えば、膨張する空間の内的分断という、ワーナーの問題提起をプロトタイプとして発展してきたアメリカ都市史研究は、今なお魔法の同心円の呪縛の中にあるの

かもしれない。だとすれば、こうした歴史学の語りは、「分断された空間」としてのアメリカ都市の現状に、どのような意味をもつのだろうか。この点も今後問われるべき課題のひとつであろう。

【付記】 本稿は平成二十三年度、科学研究費補助金・基盤研究（C）による研究成果の一部である。

（大阪大学文学研究科准教授）

négliger, car une étude portant sur une période plus récente la suggère: un groupe de géographes ayant étudié une cohorte de retraités des années 1970, montre que les immigrés à Paris, y compris les étrangers, parlent très peu du culturel, comme si leur origine ne posait aucun problème à leur vie parisienne. Afin de donner plus d'éclaircissement à ces questions, d'autres points de vue devraient être introduits, notamment une recherche sur le rôle des écoles pour les nouveaux arrivants. Cela reste à faire.

From Shock City to the Zoned City:  
Reconsidering Urban Reforms in Twentieth- Century Chicago

by

NAKANO Kotaro

This study reconsiders the significance of the intellectual perceptions of the "city" in the history of the United States. By reviewing the public discourses of urban elites in early twentieth-century Chicago, I try to elucidate the rise and fall of "city consciousness," or the historical city identity as an indivisible organic unity. This work leads to the further exploration on another aspect of the same development, that is, the origin of the current civic image as one of ecologically divided space. Is the city a socially integrated entity or a space with many boundaries defined by class, gender, religion, race and so on? I observe a historical dynamism of the twentieth-century urban history in the intersection of these two interrelated ideas of the modern city.

More concretely, this article approaches the historical perception of the city, by examining the characteristics of urban environmentalism in the following three intellectual trends: ① tenement reforms conducted by social settlement houses, ② the Chicago Plan, a city planning movement, and ③ the Chicago School of urban sociology.

The tenement reforms led by the progressive social workers, such as Jane Addams of the Hull House, who were dedicated to improving poor people's housing, represent a new trend of environmentalism. Their positive engagement with the physical conditions of slum areas differed from the

separate-sphere ideology of the preceding Victorian elites. This essay contends that the tenement reformers' endeavors to bridge different groups in the city, gave rise to an inclusive "city consciousness" in Chicago.

I argue, however, the new positive environmentalism espoused by tenement reformers was fundamentally compatible with the contemporary exclusion of ethno-racial minorities, quite paradoxically. While the reformers came to understand urban environment as a social issue, their interests in public health and social hygiene increased. They thought clean and healthful physical conditions were indispensable to decent citizenship. This idea would unintentionally produce a social mechanism to stigmatize the poverty among new immigrants and African Americans from the South with a metaphor of contagion and alienated them from civic life.

The Chicago Plan, a city planning movement sponsored by local business circles was another source of "city consciousness" in the early twentieth century. Its positive commitment to the urban landscape and park system helped Chicagoans to imagine the city as a comprehensive whole. In this field, innovative public relations activities led by Walter Moody, a sales specialist employed by the Plan Commission, contributed much to creating a sense of city loyalty. This rise of a new generation of professional personnel in the causes for large-scale renovations of built environments is worthy of further examination.

Civic identity reached its apex in the 1910s, however it suddenly collapsed during World War I. Encroached upon by wartime federal mobilization, both urban reform and city planning had to justify their causes in terms of appeals to nationalism. I consider this as the beginning of the decline of the idea that city was an indivisible organism. In actuality, Chicago's war experiences were followed by the eruptions of ethno/racial antagonism. The race riots in the summer of 1919 were the worst in its history.

It is in this context that the rise of the Chicago School's new urban sociology should be understood. A prominent feature of the scholarship of Robert E. Park and Ernest Burgess was their mapping of the segmented urban spaces sometimes occupied by ethno-racial primary groups. Their perception of the city was quite different from those of tenement reformers and city planners in that Park's human ecology and Burgess's concentric development thesis fundamentally affirmed the pluralist model of urban environments. Furthermore, it is significant that Park took the initiative on the Chicago Commission on Race Relations, which made peace after the 1919 riots, and that Burgess' model had basic affinities with the city's residential



zoning, which was begun during the same period of time. Combined with prevalence of new restrictive covenants, zoning policy sustained newly established de-facto racial segregation in Chicago from the mid-1920s. It can be said that Chicago School's urban ecology contained an ethos of social engineering that approved separating urban space for realistic governance. By the end of the 1920s, American urban elites and intellectuals were accustomed to seeing the "city" as socio-geographically divided and stratified space. This historical evolution deeply affected the way academics saw urban America. The urban historians of the present day are no exception.